

知将・

児玉源太郎大将

教育問題プロジェクトチーム

榎本 眞己 陸自71



(国立国会図書館)

1 はじめに

今回は、明治の陸軍軍人で知将として名高い児玉源太郎を紹介しましょう。児玉は、戊辰戦争、西南戦争に参加し頭角を現し、陸軍次官兼陸軍省軍務局長として兵制の近代改革を推進、日清戦争終了時には検疫部長として活躍、また日露戦争時には参謀本部次長として開戦準備に万全を尽くし、開戦後は満洲軍総司令の大山巖元帥を総参謀長として補佐し、日本の勝利に大きく貢献しました。

しかも台湾総督を初め陸軍大臣、内務大臣、文部大臣を歴任し、政治の世帯において手腕を発揮しました。

身長はわずか155cmに過ぎない小さな男ですが、その才能はズバ抜けており当代随一の人物と言われている。ドイツから兵学を教えるために派遣されたメッケル少佐は帰国の際、「将来、陸軍の児玉か、児玉の陸軍か、と呼ばれるようになる」と児玉を評したほどです。

一般的に知に聡い人物は理屈がたちますので、自負心が強く独善的になり、冷徹で人を見下したりする等により、人から尊敬されないことがあります。しかし児玉は異なりました。単なる頭脳や見識・判断力が優れているだけでなく、人柄も立派だったのです。

そこで、児玉の略歴を概観した後、児玉大将の力が存分に発揮された第4代台湾総督としての活躍と日露戦争において陸軍参謀本部次長として戦争を準備し、満洲軍総参謀長として同戦争を勝利に導いた活躍をそれぞれみてみましょう。その後、児玉の人柄のどのような点が立派だったのかを考えてみましょう。

2 児玉源太郎の略歴

児玉は嘉永5年(1852年)2月25日、長州藩(今の山口県)の支藩である徳山藩の中級武士であった父半九郎と母モトの長男として生まれました。上には姉が2人いました。父は急

進的な尊皇攘夷論者であり、藩の重役に尊皇攘夷の実行を訴えます。しかし保守的な重役は聞く耳を持ちません。逆に、半九郎の執拗な意見具申に「自宅での蟄居謹慎」を命じます。自宅の座敷牢に入れられた半九郎は、一切の食事を拒否し憤死します。源太郎が4歳8カ月の時のことでした。

このため児玉家は一挙に没落します。そこで姉の婿が児玉家の家督を継ぎ、源太郎を養育します。しかしこの義兄も源太郎が13歳のときに佐幕派により惨殺され家禄を失ってしまいました。一家は困窮します。

そのような中で明治維新となり、官軍要員が募られます。児玉は一般兵卒で入隊し函館戦争に参加します。そして明治7年の佐賀の乱には大尉として従軍し、明治9年には神風連の乱を熊本鎮台の准参謀を少佐で務め鎮圧します。

続く明治10年には西南戦争の熊本城籠城戦に参加し、鎮台司令官の谷干城少将をよく補佐し、薩摩軍の激しい攻撃から熊本城を護ります。この際、同郷の3歳年上の乃木希典(参照)先人の足跡13・平成30年4月号)が聯隊旗を失った責任を取り切腹を図ろうとしますが、これを思いとどまらせたのは児玉でした。

同じ地で学んだ武士道に二つはないはずじゃ。武士が過失をして腹さえ切ればそれで責任が解除されるということをおれは教えられておらぬが、貴様はそういう武士道を教えられたのか」と諭します。そこで乃木は切腹を思いとどまりました。

明治20年、児玉は近代軍事学を教授する陸軍大学の初代校長に桂太郎の後押しで就任します。その際、明治18年にドイツより招いたメッケル少佐がドイツ式の近代戦術を教えていたので、学生と一緒に学びます。メッケルも非凡な児玉の資質を認めて、図上作戦や実地戦術を通して、戦術家として持てる知識をすべて与えます。

その後、明治22年に38歳で陸軍少将に昇任し、明治24年10月には10カ月という長期の欧州視察を命ぜられます。当時昇進する軍人のほとんどが留学か長期の海外出張を経験していたのですが、児玉はこれが初めての海外の経験でした。

帰国後、児玉は陸軍次官(陸軍少将)を命ぜられます。時の陸軍大臣は大山巖大将であり、後に日露戦争でもコンビを組みます。日清戦争(明治27・28年)時には大本営陸軍参謀兼ねて陸軍検疫部長となり、検疫業務の責任者となります。戦争終了後、一日でも早く

故郷に帰りたい兵隊を足止めにし、誰もやったことのない検疫を行うのですから大変です。

この時、児玉は自分より5つ年下の後藤新平(39歳)を抜擢し、この検疫の実務を任せます。瀬戸内海等の小島に検疫病棟を建て人員23万余、船舶延べ687隻、物件94万弱の検疫を約半年で終らせます。このことはやがて世界中に報道され、注目を浴びます。

この児玉・後藤コンビは3年後の児玉源太郎の台湾総督(1898~1906年)就任で復活します。児玉中将は従来までの力ずくの統治から後藤を民政長官として抜擢し、民生を重視した統治に変えます。そして衛生面の改善、交通、灌漑等のインフラ整備、産業・教育等の充実を図り、今日の台湾の基礎を築きます。明治33年には台湾総督のまま第4次伊藤内閣で陸軍大臣を、明治36年には第1次桂内閣で内務大臣と文部大臣を兼任します。

日露戦争では、内務大臣から陸軍参謀次長への降格人事を引き受け、満洲軍総参謀長として腕をふるいました。

日露戦争後、陸軍参謀総長に就任。また南滿洲鉄道創立委員長も兼務しますが、委員長就任10日後の明治39年7月23日、就寝中に脳溢血で急逝します。享年55歳でした。

5日後の葬儀では、激しい雨に打た

れながら盟友の棺に寄り添い続ける乃木希典の姿がありました。

3 台湾総督としての活躍

児玉が台湾総督に就任したのは明治31年2月、47歳の時のことであり、日本が台湾を統治して3年目です。それまで樺山資紀、桂太郎、乃木希典が総督を務めましたがいずれも旨く行きませんでした。旨く行かなかった最大の理由は、風土病と土匪の存在でした。

跋扈する土匪を抑えるため軍人を投入して討伐しようとするので、大幅な経費がかかります。しかも軍事力による討伐は益々台湾人の反発を招き、治安が悪化しました。このため経済活動も盛んにならず一層財政が逼迫するようになったのです。台湾総督府の不甲斐なさに、本土では「台湾はもういい、フランスに1億円で売却しろ」との暴論まで上がってくるほどでした。

そこで児玉は、台湾の人々の生活習慣や考え方を尊重する民生を重視した統治をおこないます。このため日清戦争終了後の防疫で才能を見いだした弱冠42歳の後藤新平を、台湾総督府民政局長(後に民政長官に改称)に任命し、全幅の信頼を寄せます。

まず今まで6県・65署あった台湾の行政機構の大改革を実施させます。そして役所を台北、台中、台南の3県・

44署に統合簡素化します。同時に県知事、署長以下の人員整理を行い、勅任官以下1千人強の官吏を罷免し、質の悪い官吏の排除と行政組織の簡素化を図ります。また土匪に対しても「土匪の心情を察すれば憐れむべく、痛ましいものがある」と語り、「土匪招降策」として、時として自ら土匪の首領に会って帰順を勧めます。帰順した土匪の部族には製糖業等インフラ整備の工事に雇用し、帰順しない者は厳しく取り締まります。これにより5年で土匪を抑え込むことに成功します。

さらに風土病の原因は汚れた生活用水により病原菌が繁殖し、マラリア等の媒体となる蚊が発生することから、まだ東京にすら下水道が完備していない時代に、都市部に下水道を敷きます。また約17万人いたといわれるアヘン中毒患者の撲滅にも、積極的に取り組みます。

経済政策では、殖産局長に農業経済学および植民地経済学者の新渡戸稲造を迎え、さとうきび栽培などの生産を飛躍的に増大させます。その他にも、物資輸送のための西部縦貫鉄道や基隆港の整備、度量衡システムの平準化、教育制度の確立、戸籍制度の導入等を行います。

このように児玉は明治39年4月までの台湾総督の8年間に後藤新平の力を

借り、諸政策を断行します。その結果台湾は劇的な変化を遂げ、現在の台湾の基礎を造りました。

このように2人の統治により日本は台湾を完全に掌握することに成功し、現地の人々もこの2人を敬慕します。このことを端的に表しているのが、台湾国立博物館内に展示されている児玉源太郎と後藤新平の銅像です。この銅像が設置されている建物は当初、「児玉・後藤記念館」でしたが、大正4年の工事を完了と同時に台湾総督府に寄贈され「台湾総督府博物館」として開館されます。この際、銅像は1階ロビーに置かれました。

大東亜戦争戦後、国民政府は日本文化を排除する一貫で、この2体の立像を撤去しますが、職員が壊されな



後藤新平像



児玉源太郎像

うに隠します。その後、平成20年に博物館の設立100周年を記念し、3階に再び設置・展示され、現在も展示されています。このように台湾の人々は今でもこの2人を台湾の基礎を創ってくれた恩人として尊敬しているのです。

4 日露戦争時の児玉

児玉は、日露戦争開戦前には台湾総督のまま内務大臣を兼務していました。日露戦争が始まる約4カ月前の明治36年10月1日、対露戦計画を立案していた陸軍参謀本部次長の田村怡与造少将が過労により急逝します。ロシアと日本は海軍力において約2倍、陸軍力では約15倍であり、その戦いに勝つための作戦が立案でき、しかもその重責に耐えうる後任人物について、時の桂太郎首相及び寺内正毅陸相は悩みます。

そのような中で児玉が注目されます。しかし内務大臣は親任官（天皇の親任式を経て任命され、官記には天皇が親書）であり、参謀本部次長は勅任官（天皇が任命するが、官記には天皇御筆が捺印）のため、児玉を参謀次長にすることは降格人事となります。桂総理もそのことを気にして自ら言い出しかねていました。しかし大山巖陸軍参謀総長に請われ、児玉はその重責（台

湾総督は兼任）を10月12日に引き受けます。大山とのコンビは日清戦争時の陸軍大臣・次官のコンビから2度目です。

田村が亡くなり沈鬱としていた参謀本部が一挙に明るくなります。そして児玉は翌13日に財界の大御所である渋沢栄一を訪れ、協力を依頼します。ロシアと戦うためには約20億円もの巨費を必要とするため、その資金調達についてお願いに行つたのです。当時の国家予算は約8千万円ですので、実にその25倍が必要です。渋沢は児玉に「勝つ見込みがあるのか」と尋ねます。児玉は「勝つまではゆきません。総力をあげ、なんとか優勢に持ち込み、外交によつて戦を終わらせてもらう」ところです。作戦の妙を得、将士が死力を尽くせば、いまなら、なんとかやれます。日本はここで、国運を賭して戦う以外に道はないのです」と目に

涙を溢れさせながら答えます。渋沢もその覚悟に感涙し「児玉さん、わたしも一兵卒として働きます。どんな無理をしても、戦費調達をやりましょう」と答えます。翌15日には、児玉は自ら海軍省を訪れ、海相の山本権兵衛に会います。それは陸軍を朝鮮半島に上陸させるには海軍が制海権を有していなければならぬからであり、しかも山本は、陸軍

が海軍を従者のようにみなして使いたがる姿勢に反発していることを知っていたからです。そこで児玉は「陸主海従」の慣習を破り、「もしやると決まりましたら、『陸海対等』でやろうじゃないですか」と言います。山本は児玉が内務大臣の職を投げうってまで参謀本部次長の降格人事を引き受けたいきさつを知っていたので、即座に同意します。この協力関係が築かれたことにより、12月に山本から児玉への依頼で、

海軍の軍艦購入費を、既に決定していた陸軍の京釜鉄道建設費をもつて融通することで実現します。

これによりイタリアのゼノアの造船所では竣工されようとしていた2隻の装甲巡洋艦は、注文主のアルゼンチンから買い取られます。「春日」と「日進」と名付けられた装甲巡洋艦2隻は、じこの黄海会戦と日本海海戦で大活躍したのです。

また明治37年1月下旬には、青木宣純大佐を指揮官とする71名の特別任務班を編成させ、満洲各地に潜入させ鉄道破壊やロシア軍情報の入手にあたらせます。さらに明石元二郎大佐に百万円の工作資金を渡し、ロシアの後方を攪乱させます。今日の貨幣価値で言えば数千億円の資金です。

このような中、日露戦争は2月8日に開戦します。直ぐに児玉は兵站總監

を兼務します。これはメッケルが口を酸っぱくして教えた「兵站の完備なしには戦争の勝利はあり得ない」ということを実行面でも確実にしようとしたものです。そして6月6日には陸軍大將に任せられ、20日には新たに編成された満洲軍の総参謀長を兼務し満洲に渡ります。以降は遼陽会戦、沙河会戦、黒溝台会戦、奉天会戦（明治38年2月21日〜3月10日）などで総司令官の大

山巖元帥を補佐し、陸上での日露の戦いを勝利に導きます。

大本営では奉天会戦での日本軍勝利の報にさらなる進軍を計画しますが、児玉は急遽東京へ戻り、戦争終結の方法を探るよう具申します。それは「戦争を始める者は、戦争を終わらせることを考えておかねばならぬ」という考えからでした。

これにより、ようやく本格的な日露講和の準備が進められ、約2カ月後の日本海海戦（5月27日〜28日）の勝利と相まって、その約3カ月後の8月29日にアメリカ・ポーツマスで行われていた会議で日本全権の小村外相が苦心

惨憺し講和の合意をとりつけます。その報せを奉天の総司令部で聞いた児玉は男泣きに泣きます。共に泣いた少将・福島安正は「児玉源太郎、一生一度の男泣きであつた」と後に語っています。このように児玉は日本陸軍の力の限

界をよく分かつていたのです。いわば、児玉は日露戦争という絵を初めから終わりまでを見通して描ききっていたのです。

5 児玉源太郎の人柄

日露戦争開戦前の諸準備(財源確保、海軍との協力関係の確立、情報確保、兵站の推進)や戦争終末期の判断及び講和への意見具申等の行動は、児玉が日本を取り巻く外部環境の変化と陸軍の資源・能力を的確に把握していたから可能な事でした。しかもその考えは柔軟で、実行力に富んでいました。その器をメツケルは次のように評しました。「児玉は非凡人であり、器局(才能と度量)が大きく、進言を容れ、他人にも聴くので、参謀として、師団長として、軍司令官として、大兵をひきいて過誤なく、自由に動かす能力があり、理想の天分に恵まれている」と。

メツケルの評どおり児玉は「才能も有り度量も備わっていた」のです。しかも「進言を容れ、他人にも聴く」力もありました。これは誰の意見でも聞き入れるというのではなく、自分の意見に固執することなく他人の良い意見を聞き入れる力があつたということですから。それは、後藤新平を抜擢する等に見られるように、きつと人物を見抜く力があつたからであり、しかもその見

抜いた優れた人物を登用する力にも秀でていたのです。

普通、才能があればその才に奢るところがままあるのですが、そのようなことはなく、謙虚でした。例えば、このような逸話が残されています。

奉天戦の際に大蔵省に入省後、当時満洲軍総司令部付き勤務をしていた長男の秀雄が敵父を陣営に訪問します。その際、毎朝大将が寢室を去つてひそかに居なくなります。参謀本部内の者に聞きますが、誰も知りません。そこで、ある日、父の後をついていったところ、ある百姓小屋の傍にあつた大きな樹の下に起立のまま、敬虔な態度で太陽を拝んでいました。秀雄が声をかけると、大将は笑いながら「あ、見つかつたか。実はこの戦争がどうなるかわからないか。勝負が気にかかつて夜も眠れないのだ。それにロシア軍はその数も増すのみで戦争が長引けば長引くほど、わが軍の勝利は覚束なくなる。わが国のなすべきことは全てやつている。これ以上は自分達の力にあまる。しかし自分人間以上の力というものを知らない。何かあるまいかと色々求めたところ、まず自分の眼に映るものでは太陽以上のものはないようであるから、毎朝ここに来て国運を祈つていたのだ」と話します。

このような謙虚な態度ですから、自

分の地位や権力に拘泥しませんでした。

国際連盟次長も務め台湾統治に共に携わつた新渡戸稲造は、その著『偉人群像』に次のように書いています。

「利欲を離れて国に尽くす。その誠意がただ国家なる觀念に止まらないで、もう一層深い泉にその源があつたらしい。彼の前には歴々の総督があつた。樺山、乃木、桂などという人傑でさえも、やや手古する有様であつたのを、しかもまかなひ(国の予算)を縮小されて請負ふなどは、凡俗から考えて賢いことではない。しかるに児玉大将は他に當たる人がなかつたのを見て、自ら進んで台湾に就任したのである」

新渡戸稲造が言う「凡俗から考えて賢いことではない」という姿勢は、日露戦争を前にしての陸軍参謀次長という降格人事を引き受ける際にも見られました。振り返れば、日本陸軍が解体される昭和20年まで、降格人事を承した軍人は児玉源太郎ただ一人です。

総務部長の井口省吾少将は児玉が参謀次長の降格人事を引き受けたことに感激して、この日の日記に「もつて天のいまだわが国を棄てざるを知る」と書いています。このように参謀本部に務めている者全員が、児玉が参謀本部次長職を執つてくれるなら大丈夫と思つたのでしょう。

6 おわりに

西郷南洲遺訓に「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」という言葉があります。児玉はまさにこのような人だったので、なぜこのようなことができたのでしょうか?

それは児玉の生きる目的が階級とか、地位とか、俸給とかの形而下のことではなく、「国家の危急に際して、今自分が為すべき事は何か」という形而上のことにあつたからです。

このようなことから、財界の渋沢榮一も海軍の山本権兵衛も即座に児玉の言を聞き入れましたし、参謀本部内は当然のことながら陸軍内でも一致協力の機運ができ、この日露戦争を勝利に導く大きな一因にもなつたのです。

【参考文献】

- ・『知将児玉源太郎』 生出 寿 光人社
- ・『天辺の椅子』 古川 薫 毎日新聞社
- ・『児玉源太郎と台湾』 『歴史街道』 P H P 研究所
- ・『明治維新150年』 『別冊正論』 産経新聞社
- ・『天山巖』 三戸岡道夫 P H P 文庫
- ・『日本人の足跡・後藤新平』 産経新聞社
- ・『維新群像 新渡戸稲造』 実業之日本社